

古墳時代中期の玉作遺跡とランドマーク — ヌナカワ祭祀圏での事例 —

藤 田 富士夫

Ⅰ. はじめに

あいの風とやま鉄道線とえちごトキめき鉄道線は、富山県と新潟県の県境では海岸の際を走る。白砂と青海のコントラストが美しい。新緑や紅葉の候には山側の風景も眼を楽しませてくれる。ある時、越中宮崎駅から梶屋敷駅までの間で、特別に大きな三角形の山容が突如として浮かび上がってきた。これは私の最近の関心事と関係している。日々、神が宿る山容とは何かを問いつづけている。本誌前号では、万葉研究で所在が謎とされる「飛鳥の神奈備山」の現地比定を試みたところである⁽¹⁾。神が宿る山容は、奈良県桜井市の「三輪山」をモデルとしている。三輪山のような三角形の山は「神体山」とも称されて、古代人の祭祀対象となっている。

車窓からは、大きな山が見える。当地域では最も大きくて目立っている。山麓には私が日頃関心を寄せている古墳時代の玉作遺跡が存在している。山と玉作遺跡の間には何か関連があるのではないだろうか。本稿では、このことについて検討してみたいと思う。

Ⅱ. 古墳時代中期（5世紀）と山川の対置思想

最初に、考察の前提となる事項について予備的な解説を行っておきたい。

(1) 山川の対置思想

『万葉集』に、次の歌がある。

○三諸の 神の帯ばせる 泊瀬川 水脈し絶えずは 我忘れめや（巻9・1770）

○春されば 花咲きををり 秋付けば 丹のほにもみつ 味酒を 神奈備山の 帯にせる 明日香の川の 速き瀬に 生ふる玉藻の うちなびく 心は寄りて 朝露の 消ぬべく 恋ひしくも 著くも逢へる 隠り妻かも（巻13・3266）

前者の「三諸の神」とは三輪山（奈良県桜井市）の神をいう。三輪山は泊瀬川（今日の大和川）を帯にしている（写真1）。三輪山は、三角形の笠形をした聖なる山である。また、後者の「神奈備山」（奈良県明日香村の岡寺山）は、明日香川を帯にしている。

万葉研究において「神の山」と「聖なる川」をセットで詠む「山川の対偶」（本稿では

「山川の対置」と表す)は、これまでも指摘されているところである⁽²⁾。ここに例示した万葉歌の神奈備山は王権の祭祀対象として詠まれている。神道考古学を提唱した大場盤雄氏が、「古来最も顕われているのは三輪の神奈備すなわち三輪山である。大和平野の東辺にその秀麗な姿を示して、今も昔ながらの山そのものを御霊代としていることは、あらためて説くまでもあるまい」として、三輪山の「典型的な笠状円錐形」の山容をもって神奈備研究の標式とした⁽³⁾。また所在が謎であった「飛鳥の神奈備山」も、また三輪山型であることはすでに論じたところである⁽⁴⁾。

それでは三輪山を典型とする神奈備山の祭祀は、いつ誕生したのであろうか。三輪山とその麓に営まれた祭祀遺跡について寺沢薫氏による検討が行われている。同氏によれば、5世紀に三輪山を仰ぎ見る水垣郷(初瀬川と巻向川に挟まれた地域)で開始され、6世紀になると禁足地を中心とした地域に収斂していったとされている⁽⁵⁾。

三輪山の祭祀が5世紀に開始されたとする指摘には興味深いものがある。5世紀は、「倭の五王」が宋に朝貢外交をし、巨大前方後円墳が盛んに築造された時代である。立命館大学名誉教授の山尾幸久氏は、5世紀後半の雄略の時代をヤマト王権の完成期としている。三輪山との関連で言えば、「三輪山の神をオオモノヌシ(王権の崇り神)といい、和泉の陶邑から移された三輪君の前身が奉祀するのも、同じ雄略の時代と思われる」とし、ヤマト「王権」の内実は、4世紀後半から5世紀後半に本格的に形成されたと説いている⁽⁶⁾。

このことは倭軍の渡海(「高句麗好太王碑文」の391年)や「倭の五王」の朝貢と呼応して始まった沖ノ島(福岡県宗像市)の祭祀遺跡の状況からも良く分かる。沖ノ島は福岡市から約77km離れた玄界灘の真ただ中にあり、ほぼ中央にそびえる一の岳(標高243.1m)を最高位とする。海上からは三角形をした山容を呈する孤島である(写真2)。島の磐座や岩陰から鏡や金銅製品、滑石製模造品など豊富な祭祀遺物が出土し、古代大和王権に関わった国家的祭祀の場であったとされている。その第I段階が岩上祭祀で始まる4世紀後半～5世紀中頃とされている⁽⁷⁾。沖ノ島が神体島を成した第一の理由は、島容が三輪山と類似した笠形円錐形を成す事にあるものと考えられる。大和王権による三輪山祭祀と連動した動きであると出来よう。

菱田哲郎氏は、水辺での滑石製の祭祀具を用いたカミマツリの考古学的検討を行い、布留遺跡と石上神宮との関係や、静岡県神明原・元宮川遺跡や長野県屋代遺跡群の事例をあげて、「律令期の神祇祭祀が五世紀代の水辺の祭祀を踏襲することに注意しておきたい。このことは、律令期に神聖な場所に対する記憶あるいは意識があったことを示し、その神聖さは五世紀代の祭祀に起源をもつ」としている⁽⁸⁾。

迂遠な説明となったが、要するに冒頭に掲げた万葉歌を貫く「山川の対置思想」は、三輪山祭祀が始まる5世紀頃からのものであると言いたいのである。



写真1 三輪山と大和川（泊瀬川）の景
(桜井市粟殿地内)

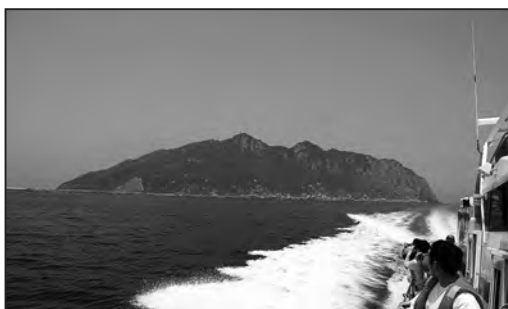


写真2 海上に浮かぶ沖ノ島



写真3 余川中道遺跡の旧河道と「八箇」の景



写真4 落子遺跡から見た「むすび山」の景

(2) 王権祭祀の地方への伝播

古墳時代中期（5世紀）は、「古代国家の形成過程を考える上で大きな変革期」にあたる。それは地方の古墳文化にも大きな影響を及ぼしている。北陸圏にあっては石川県で約60基の古墳で構成される国指定史跡「能美古墳群」が最盛期を迎え、先般「加賀の王墓と変革の5世紀」（2014年9月6日）といったシンポジウムがもたれたのは記憶に新しい⁽⁹⁾。

本稿では、このような5世紀像からヤマトの王権で成立した三輪山（神奈備山）の祭祀思想の地方伝播を見ようとするものである。この構想は2014年10月19日に開催された余川中道遺跡（南魚沼市六日町）の現地説明会に参加して、より鮮明なものとなった。遺跡からは古墳時代中期の旧河道の近接地から石製模造品や破碎土器が数か所にわたって集中出土していた⁽¹⁰⁾。旧河道の上流域には、三角形をした山容がそびえていた（写真3）。

地元で「八箇」（標高600m）と呼ばれている山である。ここを水源とする近尾川が遺跡の中央を貫流している。旧河道は、その一水脈を成している。ここでは「山川の対置」が具現している。

また昨秋（2014年12月5日）雪降る中、念願の島根県邑智郡邑南町（旧・石見町）矢上の落子遺跡を訪れた。学生時代に知友を得た故・前島己基氏が報告した祭祀遺跡で、以前から訪れてみたいと思っていた⁽¹¹⁾。遺跡からは古墳時代後期後半（6世紀後半）の滑石

製有孔円板、土製勾玉、手捏土器などが出土し、北西約1kmに遠望できる笠形をした「むすび山」（標高651m、遺跡との比高差291m）が神奈備山に比定されている（写真4）。現地では、遺跡が乗る台地の真下を「むすび山」を源流とする森実川が流れていた。

このように余川中道遺跡と落子遺跡で「山川の対置」が成立しているのを見た。このような関係について関和彦氏による、「山の神々は川を『神の道』とし、馬を、船を『神の乗り物』として人々が生活する村々へと通い、人々からの祭祀をうけたのである」、「近年、発掘で注目されている水辺の祭祀遺跡は川神の祭祀ではなく、川を通路として移動する神々を地域に招来するための祭祀場であったのである」といった考えを採用すれば、より現実味を帯びたものとなる⁽¹²⁾。

ここで次のように言うことができよう。遺跡の近域に整った山容が存在すれば、即、神奈備山となるのではない。三輪山に類似した三角形の山容を有し、その山塊からの清らかな水が祭祀場（遺跡）に流れ沿っていることが基本となる。王権祭祀では「三諸の 神の帯ばせる 泊瀬川」や「神奈備山の 帯にせる 明日香の川」と表現された景である。一方、5世紀の地方においては余川中道遺跡で見えるように、ヤマト王権の祭祀思想すなわち「山川の対置思想」が導入され実行されたものと思われる。山容は、限りなく三輪山に倣った景が理想とされたであろう。「八箇」を有し、そこに水源を有する流路が見られる土地は「山川の対置思想」に適っている。そのような土地が入念に選定されて集落形成が成されたと言えそうである。

北陸では、ヒスイ産地（小滝川および橋立産地、宮崎海岸）とその周辺域である富山県朝日町の宮崎海岸から新潟県糸魚川市の早川（二級河川）までの間、約30kmにわたって弥生～古墳時代の玉作遺跡が集中して営まれている（第1図）。当地は『古事記』「八千矛の神の歌物語」で知られる沼河比売の本貫地と見られている。沼河比売はヒスイ玉作集団と関わることから、史学界では「ヌナカワヒメ祭祀圏」と称することもある。

筆者は、学生時代にヌナカワヒメ祭祀圏の西端に位置する浜山（玉作）遺跡の発掘調査に参加した。この遺跡では、眼前に展開する宮崎海岸のヒスイ漂石を持ち込み、ヒスイ勾玉を製作しており、わが国で初めてヒスイ勾玉の工房跡の検出に成功した。時期は5世紀後半に属する。ヒスイ産地での玉作の実施とは言え、当地での浜山遺跡は孤立的である。これ以前、そして以後の玉作遺跡は存在していない。その出現はヒスイ産地に近いということだけでは説明できない。

浜山遺跡の玉作は専業工人によると見られている。製作品は滑石製模造品（管玉や白玉、棗玉）を主としている。大和王権が主導する祭祀儀礼に伴う祭具の製作に従事したのが遺跡成立の基盤にある。当然のことではあるが、祭具の製作にあたって神性を付与する祭祀が厳格に執行されたであろう。また、余川中道遺跡や落子遺跡で見たように立地環境

が意図的に選定されている可能性が高いと思われる。その、いわば聖なる環境はヤマト王権が理想とする「山川の対置」が整っている土地にこそある。

このような視点から、次に、ヌナカワヒメ祭祀圏における古墳時代中期（5世紀）の主な遺跡の具体を見ておきたい。なお、三輪山に類する山容について、神奈備山や神体山、霊山などといった既成概念を有する用語はひかえ、ここでは玉作集団（遺跡）が日常生活の中で表象している山（ランドマーク）といった程の意味で「表象山」と称しておきたい。

III. 玉作遺跡に見る「山川の対置」の景

(1) 浜山遺跡の場合

遺跡の概要 富山県下新川郡朝日町宮崎に所在する。宮崎平野へ突出した舌状台地に立地し標高15～25mを測る（写真5）。寺村光晴、竹内俊一氏などによって1967～68年にわたって2次の発掘調査が行われ古墳時代中期の2基の工房跡が検出された⁽¹³⁾。第1号工房跡は竪穴のプランが検出されたが、第2号工房ではプランは飛んでいて工作用ピットだけの検出にとどまった。

第1号工房跡は、東壁中央に工作用ピットを有しており、玉製品加工に伴う剥片が「移植ゴテで薄くはぐたびに、満天の星のごとく無数に検出された」という。ここで製作された玉製品には、滑石やヒスイの勾玉のほか、滑石製の管玉、白玉、棗玉など石製模造品がある（写真6）。工具類には浜山型の内磨き砥石や外磨き砥石、紡錘車などがある。

第1号工房跡は東壁長5.25m、西壁長5.15m、北壁長5.15m、南壁長5.1mを測り、若干胴張りの隅丸方形に近いプランが復原されている。「復原」と書いたのは、工房跡が地形の傾斜に対して45度近くズレを有して構築されており、このため西壁の床面の掘り込みが浅くなって検出されなかったことによる（第2図）。ここで問題なのは、工房跡がなぜ地形の傾斜に沿った構築法をとらなかったのかという点にある。地形の傾斜面と同一方向に主軸を置けば四方の壁は、赤土面を掘り込んで構築されたはずである。けれども実際はそうはなっていない。なお、調査報告書では北壁に接して「工作用2ピット」が検出されたとされているが、その後の検討で後世の土坑と判明したので、本稿ではその箇所を削除した図を作成した（第7図）。

伴出土器は、吉岡康暢氏編年⁽¹⁴⁾による土師IV期頃に比定でき、浜山1号工房跡は5世紀後葉に営まれていたと推定されている。2号工房跡からは特記すべき土器資料はないが、ほぼ同じ頃のものとしてされている⁽¹⁵⁾。なお、その後、出土土器は小島俊彰・小野田哲憲両氏によって古墳時代中期土器の編で仔細な報告がなされている⁽¹⁶⁾。

表象山としての明石山 宮崎地域の海岸平野は南北ほぼ0.2～0.4km、東西約4kmの細長い地勢を成す。明石山は、南域の山並の中央に位置し、もっとも平野に面して高位を成し

ている（写真7）。明石山と書いて「アゲシヤマ」と呼ぶ。標高は179.2mをピークとし、たおやかな円丘状の頂きを成す。平野から見ると裾部は扇形に広がり、東は大谷川、西は古川（上木谷）の間約900mに及ぶ。北東の大谷川河口付近から見ると整美な三角形をしている（写真8）。浜山遺跡は扇形を成す裾部の西端に発達した舌状台地に営まれている。明石山を浜山遺跡の表象山に比定したい（第3図）。なお、浜山遺跡の背後の明石山の支脈尾根（標高約80m）も平野から見ると整った三角形を呈していて気にはなるが、後述する「冬至」の日の出などから明石山が表象山として相応しいと考えている。

遺跡から見た表象山 浜山遺跡から明石山を地図で見ると[E-43°-S]を成している。浜山遺跡から明石山が仰望できるかどうかは鍵となる。今日の浜山遺跡では、台地を囲む杉木立や雑木によって山側への見通しがまったく効かない。そこで枯葉の落下が進んだ降雪期に3度（2014年12月28日と2015年1月8日・18日）の踏査を行った。それまで明石山を望むことができなかったが、たまたま眼前をふさいでいた大杉が重雪で倒木し明石山への視界が開けた。そこから三角形を成す山容が展開しているのが視認できた（写真9）。ただし遺跡からの視界には限界があるため、本稿では同一角度からの借景写真を掲載した（写真10）。

表象山を水源として 遺跡とは小谷一つ挟んで西に見崎社（三崎神社）が鎮座している。明治中期に竹谷宗次郎氏によって建立されたものである。寺村光晴氏は「御神体は砥石であった」とし、「浜山玉作の人々の祖神を祭ったものであろうか」としている⁽¹⁷⁾。社の脇には小川（幅1.5m、水深10cm）があつて豊かな清水が流れている（写真11）。また遺跡の東側には幅約20mの小さな湿地性の谷がある。ここへは明石山直下の主谷を水源とする水が集まり幅60cm、水深10cmほどの自然流水路を刻んでいる（写真12）。

その他 明石山の山頂右手寄りの一尾根が三角形を成していて遺跡の北半分から見ると眼前に迫り来るような威容を呈している（写真9）。それは、あたかも類三輪山を思わせる景を呈している。筆者はまだこの頂の踏査を行っていないが、昨年、当地域を対象として西井龍儀、田上和彦、吉田皓の三氏による古墳分布調査が行われており、それによれば明石山（標高179.2m）の丘陵端部からいくらか下がった傾斜変移端に2基の円丘が認められたという。遺跡から直視できる三角形の頂部は、この調査によって「浜山遺跡南東尾根の円丘2」が所在するとされた箇所（標高約110m）に該当すると思われる。円丘2は「径8.3m、高さ約1mである。（何れも）円丘部が不明確で古墳の可能性を注視することどめる」と報告されている。古墳ではなさそうだが、今後留意したい「円丘」である⁽¹⁸⁾。

(2) 大角地遺跡の場合

遺跡の概要 新潟県糸魚川市（旧・西頸城郡青海町）今村新田字大角地に所在する。微

高地に発達した低台地に立地し標高は最高所で5.2mを測る。寺村光晴、安藤文一氏などによって1973年に発掘調査が行われ、縄文前期中葉の攻玉関連住居跡3棟と古墳時代中期の住居跡3棟が検出された⁽¹⁹⁾。

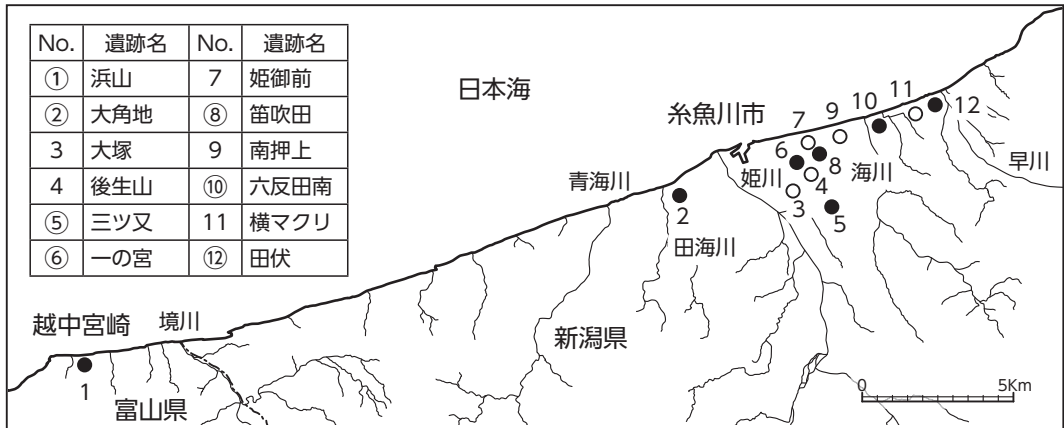
古墳時代中期に属する第7号跡は玉作工房跡である。工作用特殊ピットを有し、硬玉や滑石による石製模造品（勾玉、管玉、白玉類とそれらの研磨未成品、穿孔未成品など）が多数出土した。プランは東壁長4.07m、西壁長3.83m、北壁長3.83m、南壁長3.89mの隅丸方形を呈している。工作用特殊ピットは東壁際のほぼ中央に設けられている。伴出土器は、田伏Ⅰ式に比定され、5世紀後半の所産とされている。

表象山としての坪根口山 大角地遺跡の前面〔E-37°-S〕に、整美な三角形をした小山がある（写真13）。東寄りにはさらに大きな三角形をした山容がそびえているが、この小山はそれらとは異なって遺跡と対峙して平野側へ突出して、遺跡の表象山にふさわしいと思われる（第4図）。北東の平野から望むと独立山の様相を呈する（写真14）。なお写真13は1973年の調査地より40～50mほど東に寄っているが景視上の差異はほとんどない。調査地点を移動しての撮影は、調査後に建設された北陸新幹線の橋脚や電気化学工業のタンクなどによって良好な山容を望めなくなった事による。

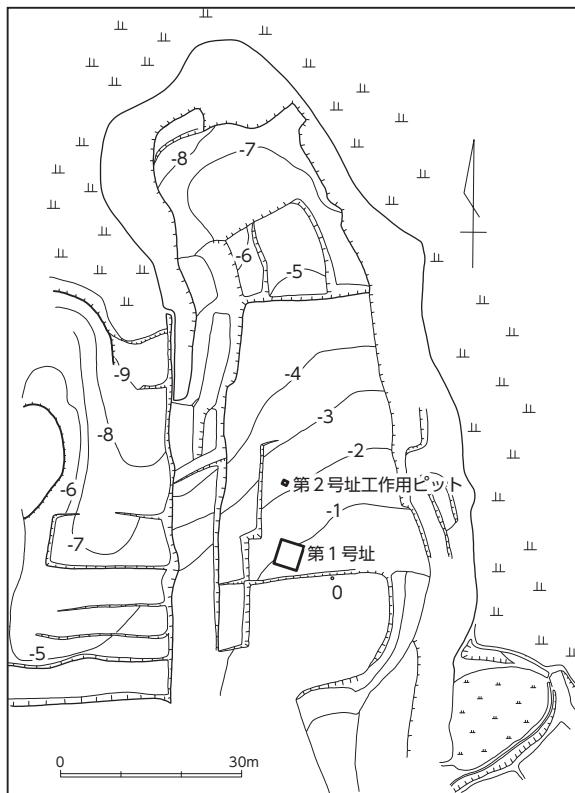
この小山は糸魚川市田海字坪根口に所在する。地域での山名呼称は不詳であるが、ここでは字名を用いて（仮称）「坪根口山」と称しておきたい。標高は約62mを測る。坪根口山と大角地遺跡との比高差は約57m、距離は約300m隔てる。坪根口山の見かけ上の幅は約400mを成す。低位過ぎる小山のように見えるが山頂からは、眼下に大角地遺跡をはじめ西南眼前に黒姫山を、東方には糸魚川市域を一望にする（写真15）。絶景の地である。

表象山を水源として 坪根口山は、南から北へと突出する細尾根を形成し、東西側面の開析谷からは豊かな湧水がみられる（写真16）。途中の流路はたどりづらい箇所もあるが、いずれも大角地遺跡の低台地に隣接して流れている。

その他 坪根口山への登頂踏査を行ったところ、細尾根の頂上北端部に塚状遺構を認めた。現存直径約9m（周溝痕跡からの推定復原で約10m）、高さ約2.2mを測る。これは『新潟県遺跡地図』や近年の中世遺跡調査に関わる分布図には記載されていない⁽²⁰⁾。ただし青海町教育委員会発行の冊子には、「今村新田の集落の裏山に時代や由来のはっきりしない『塚』または『古墳』のようなものが確認されている」とする記述がある⁽²¹⁾。これは本塚を指していると思われる。



第1図 古墳時代中期（表の○数字）を主とする玉作遺跡（●中期、○弥生・古墳前期）



第2図 浜山遺跡地形測量図

（『勾玉の故郷はまやま』より）



写真5 調査時の浜山遺跡の様子

（『勾玉の故郷はまやま』より）

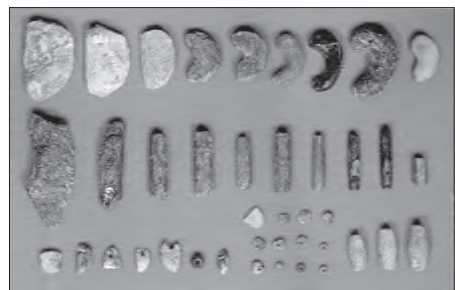
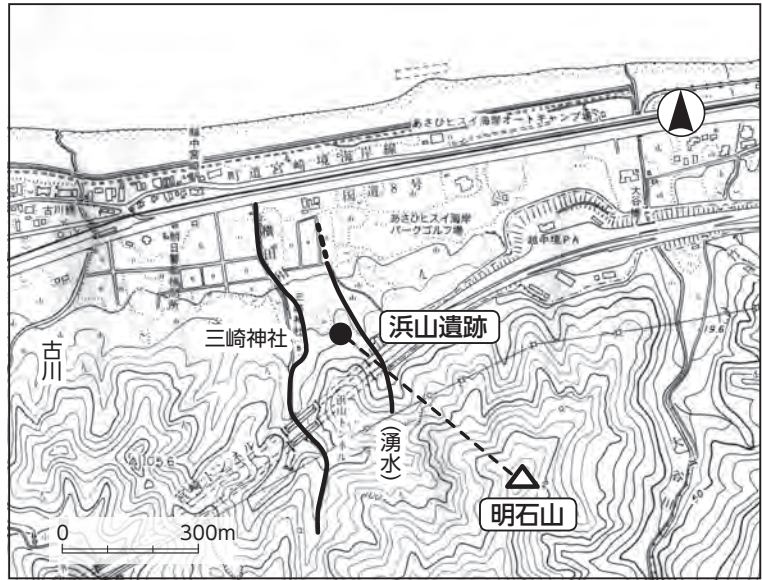


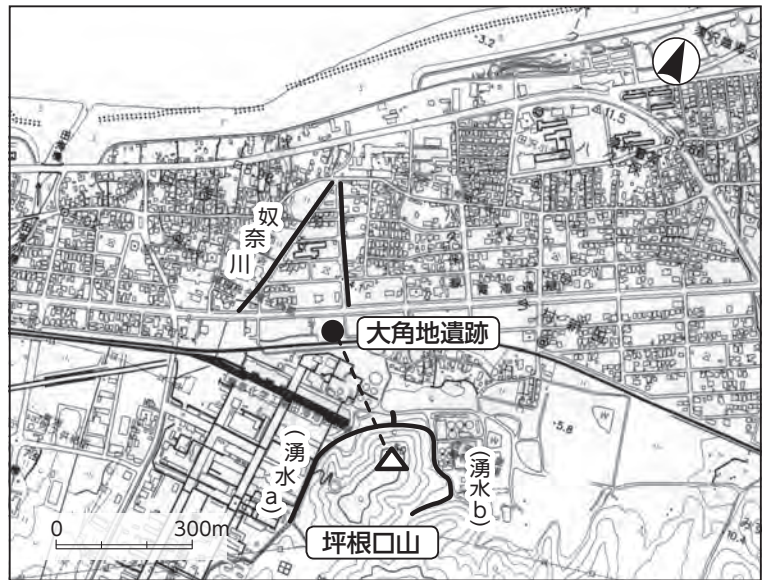
写真6 浜山遺跡でつくられた玉類

浜山玉作遺跡で作られた玉類 上段が勾玉、中段が管玉、下段が白玉や棗玉など 下段右端の長さ2.1cm

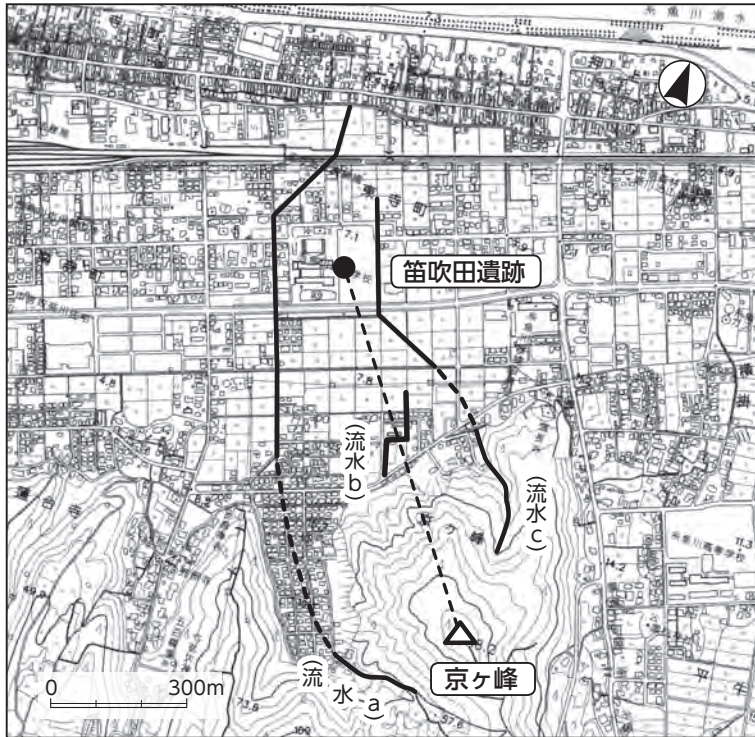
（藤田『日本の古代遺跡富山』より）



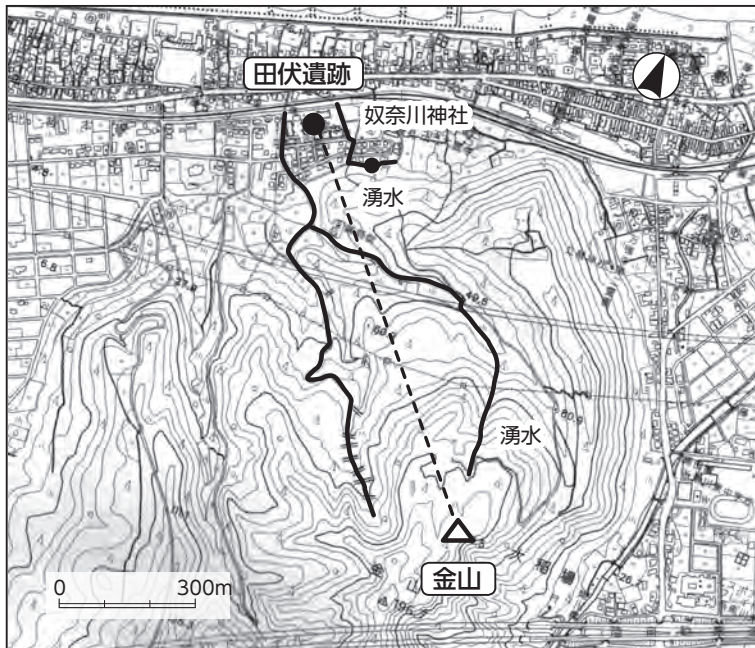
第3図 浜山遺跡と明石山の関係図



第4図 大角地遺跡と坪根口山の関係図



第5図 笛吹田遺跡と京ヶ峰の関係図



第6図 田伏遺跡と金山の関係図



写真7 明石山の景（真北から）



写真8 明石山の景（北東から）



写真9 浜山遺跡から見た明石山



写真10 明石山と浜山遺跡



写真11 見崎社のそばの清流



写真12 浜山遺跡（正面台地）の東谷の自然水路（上流から）



写真13 大角地遺跡から見た坪根口山（真北から）



写真14 坪根口山の景（北東から）



写真15 坪根口山の頂上から見た糸魚川市街



写真16 坪根口山の北裾をめぐる水路



写真17 笛吹田遺跡から見た京ヶ峰



写真18 京ヶ峰の景（南西から）



写真19 糸魚川東小学校の東側水路



写真20 糸魚川東小学校の西側水路



写真21 海から見た金山（真北から）



写真22 田伏遺跡（団地）越しに見た金山
（北西から）



写真23 金山の景（西から）



写真24 奴奈川神社からみた金山



写真25 田伏遺跡西端の水路



写真26 金山の麓で見られる湧水

(3) 笛吹田遺跡の場合

遺跡の概要 新潟県糸魚川市東寺町2丁目の通称笛吹田に所在する。微高地に立地し標高7～9mを測る。寺村光晴や青木重孝、千家和比古氏などによって1977年に2次にわたって糸魚川東小学校建設に伴う緊急発掘調査が行われた。これを最初として、その後、保育園や都市計画街路・中央大通り線の建設などに伴う発掘調査が行われている。これらの調査によって古墳時代前期～中期を主体とした約60,000㎡にもなる大規模な集落遺跡であることが確認されている⁽²²⁾。

古墳時代中期の玉作資料は最初に行われた1977年の調査で認められた。工房跡プランは、床面上部の流失などで明らかとなっていないが、工作用特殊ピットが検出された。工作用特殊ピットや柱穴の配置から、工房跡のプランが想定されているが、「明瞭でない」と断りがついている。ただ本稿では主軸方向が参考となるので検討素材に加えた。

この調査では、工房跡の推定地から硬玉、璧玉、瑪瑙、滑石製の玉類とその原石、未成品など多数が出土した。大半は滑石製でフレイク、チップまで含めると数千点におよぶ。白玉、勾玉、管玉といった滑石製模造品の未成品が主として見られる。工具類では浜山型の内磨砥石や台石などがある。

工作用特殊ピットからは甕形土器、小型甕形土器、高杯形土器が出土しており和泉式併

行期でも古式の様相を呈している⁽²³⁾。川村編年（川村2000年）では8段階に比定されており古墳時代中期初頭に位置づけられている。なお工房跡と同一の発掘区（I区）からは祭祀用の手捏土器が出土しており同一時期と見られている⁽²⁴⁾。

表象山としての京ヶ峰 笛吹田遺跡の前面〔E-48°-S〕に、円丘状の大きな頂きを有する京ヶ峰がある（写真17）。南西域から見ると、平野に迫り出した山容であることが分かる（写真18）。京ヶ峰は海川以西の糸魚川市域で、もともと平野に張り出している。標高は118.2mを成す。裾部は扇形に広がり東西の幅は約600mに及び、たおやかな三角形をしたひととき目立つ山容を成している（第5図）。

京ヶ峰の頂上部や平野へ面した支脈には中世～近世初頭と思われる塚が複数築造されていて、「山崎三十三塚」として周知され一部調査が行われている⁽²⁵⁾。伝説には、「西海村字平牛の経ヶ峯には、太古には奴奈川姫の一族が住み村の形をしてゐた。その峯の頂には神に捧げた金幣が埋められてあり、毎夜光を放つてゐたので沖の漁師の標となっていたといふ。また、平牛の某が西國三十三番を巡り帰國の後、経札を三十三の塚に埋めた。これを『平牛の三十三塚』といひ、この京ヶ峰は初一番だといふ」とある⁽²⁶⁾。「沖の漁師の標」といった伝えからも、京ヶ峰が当地域の表象としてふさわしい山容を有していることが伺える。

表象山を水源として 京ヶ峰の北面には幾筋かの小谷が刻まれていて、いずれも平野への水源を成している。笛吹田遺跡とその一帯は区画整理が進んでいて、旧水路を辿ることは困難であるが、遺跡の中心地域を成す糸魚川東小学校の敷地の東西脇には、京ヶ峰に水源をもつ複数の水路が見られる（写真19・20）。

（4）田伏遺跡の場合

遺跡の概要 新潟県糸魚川市田伏に所在する。海岸砂丘の内側に位置し、旧状は水田であった。西側の海川方向に緩い傾斜を持つ地勢を成す。遺跡の標高は約7mを測る。関雅之や戸根与八郎氏などによって1970年、市営団地造成に伴う緊急発掘調査が行われた⁽²⁷⁾。工房跡の検出は見られなかったが多数の滑石製模造品が出土した。それらには白玉とその未成品総数80個のほか、管玉、勾玉、切子玉とその未成品がある。他に子持勾玉や異形石製品、紡錘車未成品も出土した。工具類には浜山型の内磨砥石などがある。

これらの滑石製模造品は、現地表面下約30cm～100cmに堆積する第4層（黒褐色土層）に包含されていた。「4層上部からは土師器の内黒坏・高坏が多く、下部では和泉式の高坏・櫛目整形手法をもつ甕形土器が量的に多くなる。ただし、滑石原石及び玉未成品・浜山型内磨砥石などは明確に上下の分離をすることができない。ヒスイの原石については第4層の比較的下部に集中していた」と報告されている。

第4層上部の土器群は田伏Ⅱ式（鬼高式併行期）に、下部の土器群は田伏Ⅰ式（和泉式

併行期)に比定されている⁽²⁸⁾。川村編年(川村2000年)では田伏Ⅰ式は9～11段階に、田伏Ⅱ式は12～16段階に相当する⁽²⁹⁾。

遺跡の性格 出土遺物の様相は製作途中の未成品や工具類がそろっていることから玉作資料であることは疑えない。調査者は「住居址の存在を想定して、調査検討を重ねた」ものの、当地は自然傾斜地であって人為的造作は確認できなかったとしている。

このような状況は考古学的に言えば「廃棄場」とできよう。ただ若干ではあるが手捏土器(田伏Ⅰ式併行期)が出土している。手捏土器に注目すれば、発掘地点は玉作集団固有の河川祭祀の場であった可能性が高いかもしれない。遺物が集中出土したのは2m×2mグリッドのうち55-AB、54-AB、53-ABの計6グリッドであった。東西6m×南北4m=24m²の狭い範囲である⁽³⁰⁾。このことは自然傾斜が強まった低位に位置する55-Aグリッド側へ遺物が流入していたことを意味している。自然傾斜の端部には、金山に源流を有する流水路が存在していたことは容易に察せられる。

この地点が田伏Ⅰ式～田伏Ⅱ式すなわち類推歴年代で5世紀後半～6世紀後半頃までの長期間にわたって、祭祀場として選定されていたものと考えられる。

なお、田伏遺跡では調査地点に東接して延喜式内社「奴奈川神社」が鎮座している。奴奈川神社は、『古事記』『八千矛の神の歌物語』で知られる奴奈川比売(沼河比売)を主祭神としている。境内地は標高9～10mで遺物出土地点よりは高位に位置している。土田孝雄氏は、「神社境内関連施設の工事中に、古墳時代の土器や玉の遺物などが出土していた」ことから、田伏奴奈川神社と玉作り集団と十分関係がある」とし、境内地に遺跡が延びているとしている⁽³¹⁾。

境内地に居住域が営まれている可能性が高いと思われる⁽³²⁾。

表象山としての金山 田伏遺跡の前面〔E-45°-S〕に、円丘状の大きな頂きを有する金山(北端の尾根)がある。海域から見た金山は整った三角形を呈している(写真21)。標高は169.5mで、遺跡からの距離は約950mを測る。今日、遺跡からは団地で遮られていて断片的な山容が見えるにとどまるが、本来は眼前に威容を仰望することができたであろう(写真22)。西方からは平野に向けてせり出した山容を成している(写真23)。景点を奴奈川神社境内地へ移すと、眼前に金山の威容を仰ぐことができる(写真24)。田伏遺跡の表象山は金山であると思われる(第6図)。

金山は神奴奈山と呼ばれていた 金山には、中世の山城「金山城」が営まれている。山頂からは周辺域の眺めが優れている。留意したいのは小泉蒼軒(1797—1873)が著した『越後地名考』(東京大学蔵)である。そこに「金山城は早川谷田屋村にある山城なり。不動山場の砦というほかに、城主知れず。これは神奴奈(かんな)山(やま)城ともいう。田屋の西にありて、田伏地なり」と記されている⁽³³⁾。金山城は「神奴奈山城」とも呼ばれて

いたというのである。

推考するに古称カンナヤマ「神奴奈山」に「金山」の文字が充てられた可能性がある。前述したように『万葉集』には、三輪山（奈良県桜井市）と明日香の神奈備山（奈良県明日香村の岡寺山）がともに「三諸の 神奈備山」と歌われている。神奈備山は、神体山研究の指標となっている。カムナビとは「神のいます辺り」や「神のいますところ」という意味である⁽³⁴⁾。

仮に「神奴奈」（カンナ）が「神奈備」（カムナビ）から「ビ」が脱落した呼称であるならば本稿の論旨と呼応するところとなる。期待感を込めて言えば、かつての金山は「カムナビ」であった可能性があろう。この推考が正しいとすれば、5世紀後半の田伏遺跡の成立と田伏のカムナビ山との密接な関係を決定づけるものとなる。

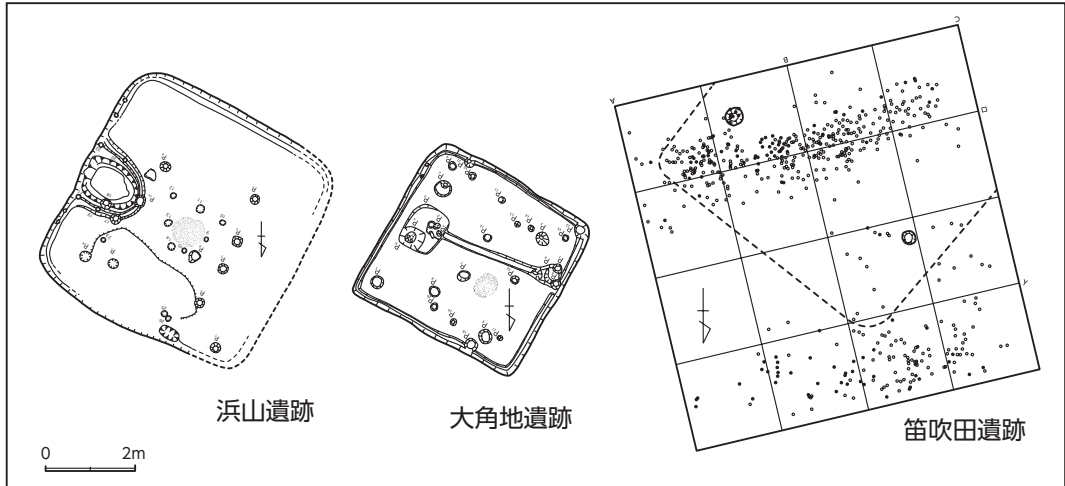
表象山を水源として 金山には、頂上直下に湧水地があり、金山城では「水が沢づたいに流れているのが集まっており、飲水場などがあったのだろうか」とされる場所もある⁽³⁵⁾。このような沢伝いの自然水路はすべて田伏遺跡の西方低地へと流れている（写真25）。また、田伏遺跡の南方では、金山の麓野で湧水が見られ、やはり田伏遺跡の方向へと流路を成している（写真26）。

IV. 冬至のランドマークとしての表象山

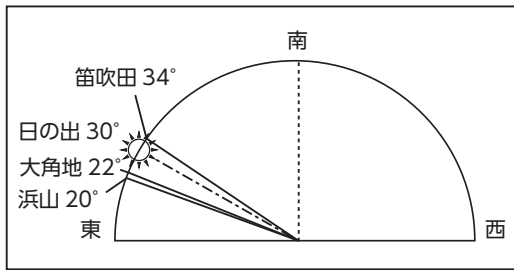
玉作工房跡は浜山遺跡（第1号跡）と大角地遺跡（第7号跡）で検出されている。また、笛吹田遺跡では明瞭ではないが推定プランが示されている（第7図）。特に、浜山遺跡では前述したように、地形の傾斜に対して45度近くズレて構築されていた。このことは地形に沿った合理的築成ではなく、人為的制約の結果であろうと思われる。主軸を北東—南西方向にとる。工作用ピットは南東壁に設けられている。その方向は表象山と見立てた明石山の頂上を示している〔E-20° -S〕。このような工房跡の方位的特色は大角地遺跡でも認められ、表象山である坪根口山を示している〔E-22° -S〕。また、笛吹田遺跡の推定プランも主軸は表象山である京ヶ峰に向いている〔E-34° -S〕。

ここで提起したいのは、工房跡の主軸方向が、当地域における冬至の「日の出」の方向—計算上では〔E-30° -S〕—を指していることである（第8図）。まだ数少ない事例ではあるが、工房跡の方位と太陽運行とが関係しているかのようなのである。

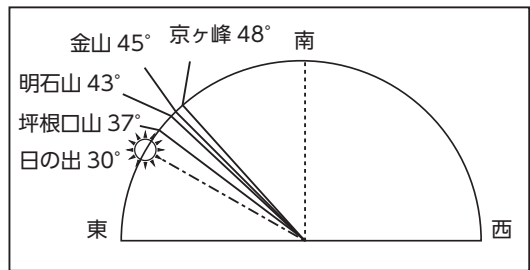
さらに遺跡立地と表象山との方位関係もこのことを支持している。浜山遺跡と明石山〔E-43° -S〕、大角地遺跡と坪根口山〔E-37° -S〕、笛吹田遺跡と京ヶ峰〔E-48° -S〕、田伏遺跡と金山（神奴奈山）〔E-45° -S〕は、それぞれ遺跡と表象山の関係を示している。表象山は、これらの遺跡においては南東方向に位置している。それは、冬至の「日の出」方向を指している（第9図）。



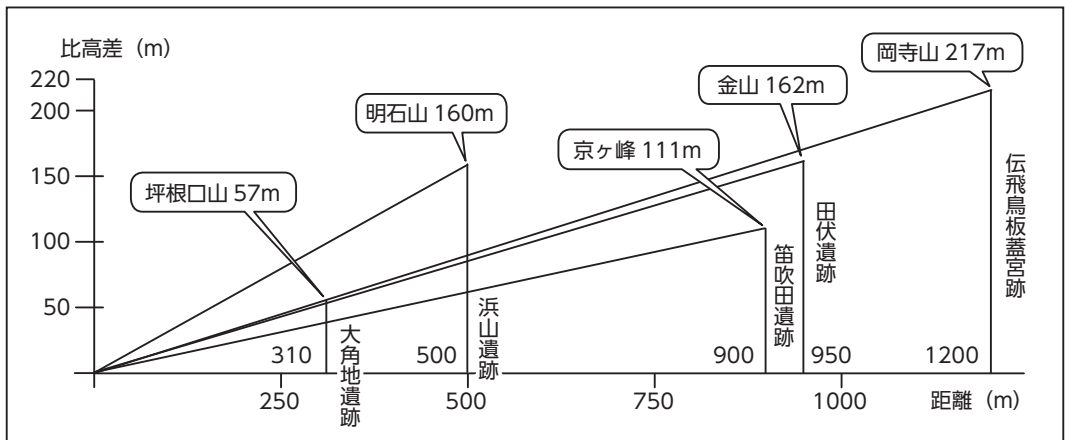
第7図 各遺跡の玉作工房跡（南を上とし、方位・縮尺は同じにした。）
 なお浜山遺跡の「工房用2ピット」は後世の土坑であり、本図では削除した。



第8図 各遺跡の玉作工房跡の主軸方位比較表
 (方位は第7図の磁北を基に真北補正を行った。☀は冬至の日の出の位置—計算上—)



第9図 大角地遺跡—坪根口山ほか各遺跡と表象山との方位及び冬至の日の出の方向（計算上）の比較表



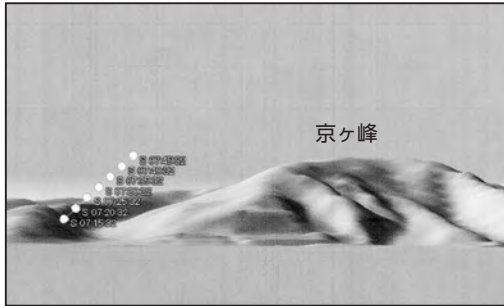
第10図 主な玉作遺跡と表象山との距離・比高差の比較表（縦軸は比高差、横軸は距離）



第11図 浜山遺跡から見た冬至の日の出
 (「カシミール3D」による)



第12図 大角地遺跡から見た冬至の日の出
 (「カシミール3D」による)



第13図 笛吹田遺跡から見た冬至の日の出
 (「カシミール3D」による)



第14図 田伏遺跡から見た冬至の日の出
 (「カシミール3D」による)

ただし実景的には、日の出の方角と時間は、入り組んだ谷地形や、前面にそびえる山脈の高度によって左右される。当地のような前面に山地が迫っているところでは、平野部での計算 $[E-30^\circ - S]$ は目安とはなるが、その通りに太陽が昇る事は稀である。微細なズレがある。現地での観測が不可欠であるが実行できていない。そこで簡易な方法ではあるが市販の『カシミール3D』を用いて、2014年12月22日(冬至)を基準日として机上観測を行ってみた。浜山遺跡では明石山の東辺の頂き近くから日の出が見られた(9時05分) $[E-49^\circ - S]$ 、(第11図)。大角地遺跡では坪根口山の頂きから日の出が見られた(7時45分) $[E-37^\circ - S]$ 、(第12図)。笛吹田遺跡では京ヶ峰主峰の東辺から日の出が見られた(7時25分) $[E-23^\circ - S]$ 、(第13図)。田伏遺跡では金山の西頂部付近から日の出が見られた(7時40分) $[E-36^\circ - S]$ 、(第14図)。

遺跡位置や標高設定など細部において後日の検証を要するところがあるが、『カシミール3D』の結果は大略を示していると解せられる。全体的に浜山遺跡や大角地遺跡、田伏遺跡は表象山の冬至の「日の出」方向と深く関わっていると見えよう。なお笛吹田遺跡では、京ヶ峰主峰(標高118.2m)とその支脈頂(標高約70m)とが重なり合う地点からの「日の出」が想定される。遺跡からの視点を、どの位置に置くかで「日の出」の位置は移動する。遺跡の西端からは京ヶ峰主峰からの「日の出」となるが、ここ(遺跡のほぼ中

央)では概ねこの辺りからの「日の出」と想定しておきたい。けだし他の遺跡と比べて変則的ではあるが、笛吹田遺跡においても京ヶ峰を基準とした冬至の「日の出」の方向に関わっていると想定しておきたい。

表象山は、玉作遺跡の日常生活の中で日々仰望されてきた表象的山容であろう。それが表象山として認知されるには、仰望(踏み込んで言えば遥拝)にふさわしい一定の距離と高さが条件となるであろう。本稿で扱った玉作遺跡と表象山の関係を図に表してみた(第10図)。その結果、大角地遺跡(仰角 60°)、田伏遺跡(仰角 59°)の実景角度はほぼ同じであった。この角度は、飛鳥の神奈備山(岡寺山)を伝飛鳥板蓋宮跡から仰望した角度と相似していた。飛鳥の神奈備山の認識は、恐らくはこれらの遺跡より後出と思われるが、古墳中期からの基準が継承されていた可能性があるかもしれない。

なお、笛吹田遺跡(仰角 51°)ではやや鈍角を成している。工房跡の主軸方向(第8図)や遺跡と表象山との在り方(第9図)、冬至の「日の出」方向(第13図)でも、他の遺跡とは少しばかり差異を見せている。この差異は時期差によるのかもしれない。笛吹田遺跡は川村編年による8段階(古墳中期初頭)に属し、他の遺跡は9~11段階に属している。この間に玉作体制の再編が成されたのかもしれない。

また、浜山遺跡からの明石山の仰望角度は、他の遺跡より強い(仰角 73°)。浜山遺跡は、他の遺跡が平野部に成立しているのに対して、唯一舌状台地に立地している。明石山から派生した山系の麓に位置している。平野部は湿地帯が広がっていて遺跡の環境には馴染まない。このような地形的な制約から、他の遺跡とは異なる仰望角度を示しているのかもしれない。

さて、古墳時代におけるランドマークの研究については大工原豊氏が精力的に取り組んでいる⁽³⁶⁾。縄文ランドスケープの視点を「古墳から眺望できるヤマや二至二分との関係性」へと援用した試みを行っている。群馬県内の大型前方後円墳の主軸についてヤマと二至二分の関係を検討したところ、5世紀前半の「浅間山古墳から見ると、夏至には浅間隠山に、二分には妙義山に日が沈むことが確認される」とし、5世紀後半の「井出二子山古墳から見ると、冬至には荒船山の中で唯一三角に尖った山頂に沈み、立春・立秋には妙義山に日が沈む」と説いている。ほかに5世紀後葉の太田天神山、6世紀の綿貫観音山古墳でも二至二分の関係性が認められたという。すべての古墳にこのような原理(思想)が認められるわけではないが、少なくともここに掲げた大型前方後円墳には「ヤマと季節を関連付けるなんらかの思想が、古墳の選地の際にはたらいっていたのかもしれない」と説いている。

本稿での研究に引き寄せて言えば、大工原氏が指摘するヤマとの関係性が5世紀初頭の新しい思想・理念で築かれた「浅間山型企画」の古墳に顕在化している点に興味深いもの

がある。ヌナカワ祭祀圏での玉作遺跡ランドスケープが顕在化してくる時期と符合しているように思われる。

V. おわりに

古墳時代中期（5世紀）に北陸のヌナカワ祭祀圏で盛行した玉作遺跡の成立はヤマト政権による地方再編の動向と関わっているであろう。そこには三輪山を典型とする神奈備山をモデルとした「山川の対置思想」も同時に及んだものと考えられる。

ヌナカワ祭祀圏における表象山はランドマークとして冬至の「日の出」と密接に関わっているように思われる。工房跡の主軸方向、遺跡の立地、いずれもこれを支持している。「山川の対置思想」の一端が、このようなカタチで表出したものと解せられる。

浜山遺跡は、5世紀後半に宮崎の地に突如として出現している。ヤマト政権による祭具製作体制の再編によって営まれた遺跡であり、新しい選地原理に沿って成立したと考えられる。浜山遺跡は、冬至の「日の出」のある明石山を表象山としている。奈良盆地の東に位置する三輪山は、太陽の日の出と関わる神奈備山である。太陽運行を生活の基本とする思想で共通している。

また、本稿では表象山を水源とする清水にこだわった。ほどほどの山塊であれば、どの山でも流水がある。表象山に特化した事象ではない。けれども、表象山を水源とする清らかな水が遺跡の脇を流れていることが重要なのである。その事は、関和彦氏の論考の引用によっても説明したところである。

なお、ここでは触れなかったが古墳中期の玉作遺跡にはほかに三ツ又遺跡、一の宮遺跡、六反田南遺跡がある。いずれも顕著な表象山を確認できず、今回の私のフレームワークには入りきらなかった。これらの遺跡の成立には別の原理が働いているのかもしれない。いつかその解明に挑戦してみたいものと思っている。

普段さりげなく見ている凡庸な風景が、突如として遺跡と関わる「表象山」であったと言われても、にわかには付いて行けないと感じられた識者も多いであろう。類推を重ねた稿となり、実際、考古学的には証明の難しい事を論じているので、やむを得ない。「表象山」と見えるものも、あるいは偶然の所産として退けられるかもしれない。今後、多様な視点から検証を要するであろう。ただし私には古墳中期の変革と玉作遺跡の成立とが無関係とは思えない。その中で「山川の対置思想」が地方にも持ち込まれた可能性が高いと考えている。識者のご教示やご批判を頂ければ幸いである。

末筆となったが、図版などの作成にあたって中村年昭と藤田哲史氏のご協力を得た。記して謝意を表したい。

註

- (1) 藤田富士夫「飛鳥の神奈備山の比定に関する実景論的考察」『人文社会科学研究所年報』No.12 敬和学園大学 2014年, 89~107頁。同「伝飛鳥板蓋宮跡から見た飛鳥の神奈備山について—実景から探る—」『野外調査研究所報告』第22号 NPO法人野外調査研究所 2014年, 50~62頁、同「明日香の神奈備山再考」『季刊 明日香風』第133号(公財) 古都飛鳥保存財団 2015年, 15~20頁。
- (2) 奥村和美「家持の『立山賦』と池主の『敬和』について」『萬葉集研究』第32集 塙書房 2011年, 188~192頁
- (3) 大場盤雄『祭祀遺跡—神道考古学の基礎的研究—』角川書店 1978年版, 19~21頁
- (4) 註1に同じ。
- (5) 寺沢薫「三輪山の祭祀遺跡とそのマツリ」『大神と石上一神体山と禁足地—』筑摩書房 1988年, 37~74頁
- (6) 山尾幸久『古代王権の原像 東アジア史上の古墳時代』学生社 2003年, 183・193頁
- (7) 佐田茂『考古学ライブラリー63 沖ノ島祭祀遺跡』ニュー・サイエンス社 1991年64~65頁
- (8) 菱田哲郎『古代日本国家形成の考古学』京都大学学術出版会 2007年, 87~94頁
- (9) 川端誠「第21回 石川の歴史遺産セミナー『加賀の王墓と変革の5世紀』に参加して」『石川考古』第322号 石川考古学研究会 2015年, 3頁
- (10) 『余川中道遺跡現地説明会資料』国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務局・(公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団ほか 2014年10月19日開催, 1~4頁
- (11) 前島己基「石見における祭祀遺跡の新例」『季刊文化財』第23号 島根県文化財愛護協会 1974年, 34~37・43頁。同(再録)『雪のしたに咲く花』前島己基氏追悼集刊行会 2010年 35~37頁
- (12) 関和彦「第3章 古代びとの語った神話世界と出雲大社」『出雲大社 日本の神祭りの源流』終風社 2013年, 71頁
- (13) 寺村光晴・竹内俊一・小島俊彰ほか『勾玉の故郷 はまやま』富山県教育委員会・朝日町教育委員会 1969年
- (14) 吉岡康暢「北陸における土師器の編年」『月刊 考古学ジャーナル』3月号(No.6) ニュー・サイエンス社 1967年, 10~15頁
- (15) 小島俊彰「5 土器」『勾玉の故郷 はまやま』富山県教育委員会・朝日町教育委員会 1969年, 34頁
- (16) 小島俊彰・小野田哲憲「51 浜山遺跡出土の土器」『土師式土器集成本編2(中期)』東京堂出版 1972年, 61頁
- (17) 寺村光晴『翡翠—日本のヒスイとその謎を探る—』養神書院 1968年, 145頁
- (18) 西井龍儀「朝日町宮崎南部の丘陵調査報告」『連絡紙』238号 富山考古学会 2014年, 3~4頁
- (19) 寺村光晴・安藤文一・千家和比古『大角地遺跡—飾玉とヒスイの工房址—』青海町教育委員会 1979年。
- (20) 新潟県教育庁文化行政課編『新潟県遺跡地図』新潟県教育委員会 1980年, 新潟県92地図、小池勝典ほか『一般国道8号糸魚川地区橋梁架替関係発掘調査報告書 宮花町遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第239集 新潟県教育委員会、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2012年, 8~10頁
- (21) 青海町教育委員会編『歴史／文学プロムナードおうみ』青海町教育委員会 1990年, 11頁
- (22) 寺村光晴・土田孝雄・千家和比古ほか『笛吹田遺跡』糸魚川市教育委員会 1978年、大森勉『糸魚川市遺跡範囲確認調査報告書』糸魚川市教育委員会 1983年、大森勉ほか『笛吹田遺

- 跡範囲確認調査報告書』糸魚川市教育委員会 1984年、山岸洋一「笛吹田遺跡—古墳時代の玉類・石製品の生産集落—」『第17回遺跡発掘調査報告会』新潟県教育委員会、糸魚川市教育委員会、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2010年、33頁
- (23) 安藤文一「第5章 総括 1遺跡について」『笛吹田遺跡』糸魚川市教育委員会 1978年、38頁
- (24) 春日真実「第V章 まとめ 6遺跡の存続期間」『一般国道8号糸魚川バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ 六反田南遺跡・前波南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第202集 新潟県教育委員会、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2008年、79頁
- (25) 木島勉『昭和63年度発掘調査報告書 立ノ内遺跡・山崎三十三塚』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書第16 糸魚川市教育委員会 1989年、20～32頁
- (26) 註25に同じ、22頁。
- (27) 関雅之『田伏玉作遺跡 新潟県糸魚川市田伏遺跡発掘調査報告書』糸魚川市教育委員会 1972年
- (28) 註27に同じ、40頁。関雅之「本陸Ⅱ 新潟県」『日本玉作大観』吉川弘文館 2004年、126～127頁
- (29) 註24に同じ。
- (30) 河川祭祀の事例として新潟県南魚沼市六日町の余川中道遺跡が参考となった。2003年度の発掘調査で祭祀関連の石製模造品を集積した土器集中遺構が12カ所検出された。最小はDO65遺構で1.8×1.1m、最大はDO296・DO297・DO298の一括遺構で6.2×3.5mと報告されている。年代は5世紀後半から6世紀前半で田伏遺跡と同年代である。「祭祀行為は居住域で行い、祭祀終了後に集落南側の低地に祭祀で使用した土器や石製模造品をその都度廃棄していたものと考え」とされている（飯坂盛泰・外山浩史ほか『一般国道17号六日町バイパス関係調査報告書Ⅰ 余川中道遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第139集 新潟県教育委員会、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2005年、22～24頁・43頁）。
- (31) 土田孝雄『奴奈川姫讃歌—久比岐の郷のロマンと歴史—』奴奈川姫の郷をつくる会 2008年、235～239頁
- (32) 調査報告書によれば、「社地から白玉及び滑石片が採集されている。しかし、宮司榊茂氏によると、社地は盛土であると言われている」とされている（註27、5頁）。それが盛土であったとしても、白玉及び滑石片を包含した土の搬入元が問題となる。土田氏は、社地からの出土を積極的に評価されている。ただし、古式土師器を出土する糸魚川市寺町の姫御前遺跡を「一説によると式内社奴奈川神社の旧社地とする伝承もある」（註27、6頁）とされており、神社と玉作遺跡との関連については今後の課題となる。
- (33) 植木宏「金山城」『上越の城』上越市史叢書9 上越市 2004年、181～184頁
- (34) 上野誠『日本人にとって聖なるものとは何か—神と自然の古代学—』中公新書2302 中央公論新社 2015年、98頁
- (35) 註33に同じ、183頁。
- (36) 大工原豊「縄文ランドスケープと古墳ランドスケープ—群馬県における景観考古学の可能性—」『第1期群馬学センターリサーチフェロー研究報告集』群馬県立女子大学群馬学センター 2012年、6～8頁。同「縄文ランドスケープ—縄文人の視線の先を追う—」『フィールド科学の入口 遺跡・遺物の語りを探る』玉川大学出版部 2014年、106～109頁